

依存性の発達的研究: I

大学生女子の依存性*

東京大学
高橋恵子**

問題

ここでいう依存性とは「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義される依存要求を充足するためにひきおこされる依存行動のパタンである。そして、このような依存性、すなわち依存行動のパタンは、(a) 依存行動の様式(依存の様式<mode>)とそのドミナンス、(b) 依存要求が生じた際に依存行動が向けられる対象(依存の対象<object>)の分化とその数・種類、(c) 各対象に対してむけられる依存行動をひきおこす依存要求の強度(依存要求の強度)の3つによって記述しようとする。

(a) 依存の様式としては、依存の対象と接近していて、身体的なしかた、あるいは助力や関心・承認などのかたちで、依存要求に対するフィード・バックが常に身体的・直接的に与えられるという様式から、時空的な接近を必要とせず間接的あるいは象徴的なフィード・バックが与えられたり、あるいはそうされるであろうことへの予期や確信によって要求を充足させる様式までも含み、各依存の対象によりそのドミナンスが異なってくる。(b) 依存の対象としては家族・友人・先輩などの身近なものばかりでなく、尊敬する人、偉人、本で接する人、神など、身近でないものや、人間の象徴をも含む。また、前述の依存の様式によっては、対象としての母親が象徴的な母親像の形になっていることもあり、身近な対象でも象徴的に機能する場合もある。(c) 依存要求の強度は、依存の対象と要求の強度とにより相互関連的に決定されてくるもので、ある一定量の(そのほとんどが幼児期に決定されると考えられているのであるが)一般的な依存要求が各対象に分配されているというよりは、各対象の性質・条件・あるいはある個人の持つ対象の種類により、幼児期以後にも変化し、増大することすらあると考

える方が妥当と思われる。

本研究はこのような意味での依存性の発達の変容を自立の増大・獲得という点から解明しようとするものである。その場合、依存から自立への変化を従来のように前者の単なる否定——依存要求の低下、ないしは依存要求が生じても依存行動を抑制する逆方向への力(すなわち、依存の不安)が働くこと——とみるのではなく、現象的には依存の対概念として自立を重視しながらも、健康な成人においても依存要求があり、それが内示的に(implicit)充足されることが自立のためには必要なのだという連続性を仮定し、いわば潜在的メカニズムともよぶべきものを問題にしていこうとする(高橋, 1967)。この見地からすれば、自立とは依存性のひとつの状態として次のように定義づけられる。「依存要求の即時的な充足に対して、文脈に応じた統一的な自己の立場からの決定をくだすことを優先させることができる状態である。」そして、このような自立は次のような相互関連的な3つの方向において生ずる依存性の発達により可能であろう。

- 1) 依存の対象が分化し、数が増加し範囲が拡大する。
- 2) 依存の様式が身体的・直接的なものではなく、間接的・象徴的なものへと変化する。
- 3) 依存要求の充足の仕方が直接的から間接的、あるいは現実的から象徴的になる。

本研究では、この依存から自立への発達における潜在的メカニズムとしての依存性の発達の変容を、依存構造というモデルを用いて実証的に解明しようとしている。

依存構造とは、その意味において相互関連的な依存の対象の集合であって、(1) ある個人(大学生女子)が限られているとはいえいく人もの依存の対象を持つことができる、(2) その対象のなかでも特にある人の存在を支える中核的な対象(焦点<focus>)がいる、(3) 焦点以外の対象は焦点と相補的に分化した役割を持つ、などの予備的調査(江口, 1964)で発見された事実を説明するためのモデルとして出されたものである。

本研究では、この問題を、依存性がいちおう発達の最

* The dependent behavior in female adolescents: I

** by Keiko Takahashi (The University of Tokyo)

旧姓 江口

終段階に達していると予想される青年女子について類型的にとらえようとし、次の4点を仮説としてたてた。

- 1) 各個人において依存構造には比較的依存行動のむけられることの多い特定の対象が認められるであろう。
- 2) この特定の対象は、その個人の精神的な支えにおいて中核的な役割りをはたす焦点とみなしてよいであろう。
- 3) 依存構造の中のある対象への依存の様式および依存要求の強度は、その構造に属する他の対象への依存の様式、依存要求の強度によって異なるであろう。
- 4) 依存構造の焦点のいかにが、他の対象への依存の様式、依存要求の強度を異ならしめるであろう。したがって、焦点によって類型化をすると、型ごとに対人的な依存行動の差異が認められるであろう。

方 法

1. 依存性のとらえ方

前述のように依存性を (a) 依存の様式とそのドミナンス, (b) 依存の対象の分化とその数・種類, (c) 依存要求の強度, の3要因によりとらえる。さきに紹介したように(江口, 1966), 依存性の操作的定義については従来の研究者はほぼ一致した見解に達している。本研究ではそれらをも参考にして次のような5つの様式を定めた。

- 様式① ともに在ることを求める
- 様式② 注意をむけてもらうことを求める
- 様式③ 助力を求める
- 様式④ 保証を求める
- 様式⑤ 心の支えを求める

この5つの中で、様式①, ②, ③は④や⑤に比べ身体的・受動的で幼い様式であるといえる。

2. 質問票の作成

質問票はいく人か対象に対する依存要求の強度と依存の様式をとらえる調査Ⅰ, 各対象の性格・特徴を記述させる調査Ⅱ, および家族構成, 父母との親密度などを問う付加的調査から成る。

調査Ⅰ：これはさきの2回の調査(江口, 1963, 1964)で用いたものを修正したもので、5つの様式に分類される具体的な依存要求をあらわす24項目から成る。なお、各項目がその様式を正しく表現しているかを明確にするために、24項目を5つの様式に分類する作業を、パーソナリティについての研究を専門とする心理学者3名に依頼した。そして筆者をも含めて4名のうち2名以上が一致している様式をその項目の様式とした*。そして、こ

* 4名が一致した項目 9, 3名が一致した項目13, 2名のみ一致した項目2である。

の24項目について予備的調査(江口, 1964)で対象として出されることの多かった、母親, 父親, もっとも親しいきょうだいのひとり, もっとも親しい友人, ごく普通の友人のひとり, 異性で一番好きな人, もっとも尊敬している先生のひとり, もっとも尊敬している人, の計8人に対して、気持ち(そうである〜ちがう)の5段階のいずれにあてはまるかを、それぞれ独立に、都合8回評定させた。そして、この得点によって依存得点を出した。得点の与え方は(そうである〜ちがう)の5段階に順に4, 3, 2, 1, 0と与え、1名の対象についての依存得点は24項目の合計があらわすというものである。

調査Ⅱ：これは、各個人における依存の対象の位置づけをみようとするものである。文章完成法形式で、④その個人の存在を支えるという意味での機能を果たしているものが何であるかを自由に書かせるというもの(例—私の心のよりどころは、——, 私の心がもっともたよりにしているのは——, 私の生きがいは——, など)5項目, および、逆に、⑤予想される依存の対象の精神生活における意味や価値を書かせるもの(例—父は私にとっては——, 母は私にとっては——, 恋人は私にとっては——, など)13項目からなる。

付加的調査：このうちの父母との親密度の測定は次のようなものである。これは、予備的調査(江口, 1964)で父, 母の精神生活における価値の規定の記述にあらわれた表現を手がかりに作成した7項目から成るもので、親への親しさの程度を、肯定的なものから否定的なものへ7段階で父, 母別個に評定させた(例—大好きである〜気があわない, 愛すべき人だと思う〜ただの月給運搬人だと思う)。そして、肯定的〜否定的の7段階に+3〜-3の得点を与え、7項目の合計点をもって、父または母への親密度点とした。

3. 調査の対象と実施

対象は私立T大学文学部の1年および3年の男女であるが、ここでは女子168名の資料について報告する。実施には50〜100分を要し、1964年10月に行なった。

4. 結果の整理

まず、依存構造の類型化は、問題で述べたように焦点が何かをその基準とする。

焦点の基準としては原則的には調査Ⅰで測定される依存得点が第1位のものをそれとする。ただし、第1位と第2位の差があまりにも小さいときには、複数焦点(multi-focus)と考える方が妥当かもしれない。ここでは恣意的に次のような基準を定めた。

まず、本標本における第1位と第2位の得点の差の分布をみると、10点以上差があるもの33.1%, 9〜4点の

差のあるもの 31.4%, 3~0 点の差のあるもの 35.5% となった。そこで、得点の差が 10 以上を「差あり」、3 以下を「差なし」とし、他の対象にくらべ依存得点が高く「差あり」と判定される対象（これが 2 人以上のときには、その間には「差なし」でなければならない）を「焦点」とみなす。また、このようにたがいに隣接した依存得点の差では上記の基準に合致しない場合には、真に「焦点」とみなされる対象があるか否かを調べるために、“ゆるめた基準”を定めた。すなわち、この場合には、隣接したものの得点差ではなく、第 1 位と第 3 位、第 1 位と第 4 位、第 1 位と第 5 位の各差をとり、前述の基準をあてはめることにした。

なお、これらの基準によって同じく「焦点」とみなされる対象でも、「焦点」にむけられる依存要求の強度によって他の対象への依存行動も異なるという質的差異が予想される。そこで次の基準によって「焦点」の得点が高いもの（上位群）、低いもの（下位群）の 2 群に分ける。すなわち、被調査対象大学生女子 1 年 105 名、3 年 63 名の第 1 位の対象（「焦点」）の得点の分布は最大可能得点 96、最小可能得点 0 のうち、1 年では 96~55 に、3 年では 96~45 の間にある。したがってこれらの標本は全体的に＜そうである＞の側、つまり、依存要求の強度の強い方に偏っている。そこで、「焦点」の得点が＜そうである～ちがう＞の 5 段階のうち、高い方から 2 つめの＜どちらかといえばそうである＞よりも高いものと低いものの 2 群、得点でいえば 72 点（3 点×24（項目））を境に、上位群、下位群に分割する。なお、本標本における両者の割合は 118:50 となった。

次に、依存構造内の対象の役割り分化の様相をみるための調査Ⅱの結果の整理は以下に行なった。まずⅡ-⑨の精神生活において機能を果たしているものの記述では、(1)人間、(2)人間以外、(3)自己の 3 つの範ちゅうに分け、さらに(1)人間については、母親、父親、家族、きょうだい、愛情の対象(love object)、友人、その他、の 7 つに、また、(2)人間以外について、生き方、神、格言、その他、の 4 つに分け、5 項目についてそれが用いられる頻度をみ、依存の各対象が精神的支えとしてのどの程度中核的なものとなっているかをみた。そして、Ⅱ-⑩の各対象についての記述では、(1)肯定的情緒的規定（情緒的に肯定しているもの一例 母は私にとっては生きがいであり、母を思いだすだけでも心の安まる思いがする）、(2)中性的規定（道具的・手段的な価値のみを重視しているもの一例 父はわたしにとっては金銭的な支えである）、(3)拒否的規定（その対象の存在の必要性が否定されているもの一例 母はわたしにとってはもの

たりない人だ。自分は母のような生きかたはしたくない）、(4)同情的規定（自分にとっての相手の積極的な価値は認めないが、相手の自分への愛情はうけとめているもの一例 父はわたしにとってはたよりがいはないが、自分のことをだれよりも愛してくれている）の 4 つの範ちゅうに分類し、依存の対象への心理的距離を見た。

結 果

1. 依存構造の類型の分布

上述のように操作的に定めた依存構造の型の基準を手がかりに類型化し、次の 3 群に分けた。

1) 単一の対象の依存得点が高とかけはなれて高い単数焦点型（F 型）

この型においてはこの単一の対象が依存構造の中核となっている真の焦点であろうと予想される。（この点については 2. で検討する）この単一の「焦点」が認められる型では、この対象がほとんどすべての様式においてもっとも得点が高いのが特徴である。この F 型に属するものは最高点をとる単一の対象が何であるかによって、さらに、母親型、愛情の対象型、親友型、尊敬する人型、父親型、先生型、きょうだい型、の 7 つに分かれる。上位群、下位群における分布は Table 2 のとおりである。

2) 2 人以上の対象の依存得点が高とかけはなれて高い複数焦点型

この型のなかには、第 1 の基準により複数-焦点型と判定されるもの（MF 型）と、第 1 の基準ではどこまでが焦点かを定め難く、“ゆるめた基準”によって準-複数焦点型と判定されるもの（quasi-MF 型）とがある。

Table 1 依存構造の類型化の得点上の基準

類 型		基 準
F 群	F 型	$O_1 - O_2 = d_1 \geq 10$
MF 群	2 F 型	$d_1 \leq 3$ and $O_2 - O_3 = d_3 \geq 10$
	3 F 型	$d_1 \leq 3, d_2 \leq 3$ and $O_3 - O_4 = d_3 \geq 10$
	4+ F 型	$d_1 \leq 3, d_2 \leq 3, d_3 \leq 3$ and $O_4 - O_5 = d_4 \geq 10$
準MF群	準 2 F 型	$3 < d_1 < 10$ and $O_1 - O_3 \geq 10$
	準 3 F 型	$3 < d_1 < 10, 3 < d_2 < 10$ and $O_1 - O_4 \geq 10$
	準 4+ F 型	$3 < d_1 < 10, 3 < d_2 < 10, 3 < d_3 < 10$ and $O_1 - O_5 \geq 10$
DF 群	DF 型	上記の基準にすべてはずれるもの

（注） O_1 は第 1 位の対象の得点、 O_2 は第 2 位の対象の得点を示す。以下同様に各対象の得点を示す。

Table 2 依存構造の類型と実数

焦 点 類型	F 群							MF 群			準 MF 群			DF 群	計
	母親型	愛情の対象型	親友型	尊敬する人型	父親型	きょうだい型	先生型	2F型	3F型	4+F型	準2F型	準3F型	準4+F型	DF型	
上位群	11	26	3	6	1	1	1	7	7	5	19	20	8	3	118
計	49							19			47			3	
下位群	4	2	1	1				6	1	8	8	12	5	2	50
計	8							15			25			2	

Table 3 精神的な支えの機能をはたすものの頻度

類 型		母 親 型 n=11						愛情の対象型 n=26						親 友 型 n=3			尊敬する人型 n=6					
項 目 対 象		わたし の心の よりどこ	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ
		わたし の心の よりどこ	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の生き がいは	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ	わたし の心の よりどこ
人 間	母 親	3	1	7	6	6	1		6	7	5			1			1	5	3	4		
	父 親	2		5	2	2	1		7	3	2							1	1			
	家 族				1	3	2	3	2	1	1								1			
	きょうだい																					
	愛情の対象							4	5	2	5	7										
	友 人							1		2	4	2			1	1						
	そ の 他							1		1	2						1		2	1	1	
人 間 以 外	生 き 方	1	6		2			7			1		1			1		3				
	神									1							2	1	1	1	1	
	格 言				1										1	1						
	そ の 他							7	2		4	3	2	2		1	1	2			1	
自 己				4					8					2								

MF型は得点からいえば複数の焦点を持つと予想されるもので、この型においては複数の焦点と考えられる対象が補いあって、ほとんどすべての様式の最高得点を占めている。このMF型に属するものには、2人が他に比べて高いもの(2F型)、3人が高いもの(3F型)、4人以上が高いもの(4+F型)がある。大学生女子におけるMF型の分布はTable 2のとおりである。

また、quasi-MF型は、MF型に類似した特徴を示しその分布は同じくTable 2のとおりである。

3) “ゆるめた基準”によってもどこまでが焦点かを定め難いもの(DF型)

DF型はTable 2に見るように、上位群118名中3名、下位群50名中2名となっている。

なお、上記3群の操作的な分類の基準はTable 1に示すとおりである。

2. 各類型における依存行動

次に各類型における依存行動の特徴を、人数の関係上位群においてみることにしよう。

Table 4 対象の様式別の得点

類 型	母 親 型 $n=11$				愛情の対象型 $n=26$				親 友 型 $n=3$				尊敬する人型 $n=6$			
対象 様式	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤
母 親	84.5	86.8	85.6	90.2	65.7	67.3	64.5	60.7	83.3	56.7	60.0	50.0	80.8	72.0	79.4	79.2
父 親	62.2	69.4	75.0	61.2	55.0	61.9	67.8	57.3	63.0	51.7	58.3	34.7	47.0	59.0	67.0	48.6
きょうだい	65.4	71.5	59.7	52.7	53.0	62.0	56.3	51.9	58.0	68.3	69.7	48.7	56.4	43.0	49.4	45.8
親 友	60.9	61.4	59.9	38.3	49.7	49.8	68.2	53.8	87.0	88.3	84.7	73.7	69.2	66.7	70.2	58.3
友 人	41.3	43.6	45.9	24.9	40.0	41.0	42.5	27.7	56.0	58.3	61.3	30.7	47.7	51.7	52.2	40.3
愛情の対象	65.6	64.0	67.4	59.2	91.2	90.0	88.3	38.8	61.0	55.0	68.5	54.5	77.5	65.0	73.5	56.3
先 生	42.2	50.6	62.9	34.2	44.0	54.4	69.5	38.3	46.3	68.3	74.0	36.0	59.0	64.2	79.3	57.7
尊敬する人	50.3	52.5	55.7	39.7	52.1	58.5	72.2	48.4	45.0	80.0	77.5	39.5	94.7	83.3	94.5	97.3

(注) 数字はすべて、最高得点に対する比に換算したもの。

各式の項目数は ①+② 7, ③ 5, ④ 6, ⑤ 6 である。

1) 母親型

これは8人の対象のうち特に母親への依存得点が顕著に高く、さきの操作的基準にもとづいて母親が「焦点」と判定された型である。この型の特徴をみるにあたっては、まず、この他とかけはなれて得点の高い母親が真の意味の焦点となっているか否かを調査 I 以外の資料においてみる必要がある。

まず、精神生活における価値や意味を文章完成法形式で記述させた対象の規定において母親がいかに規定されているかをみると、11例中9例が肯定的情緒の規定を、1例が中性的規定をし、残りの1例が無答で、精神生活において母親は情緒的に受容されていることがわかる。そしてまた、個人の存在を支えるという意味の機能を果たしているものについて同じく文章完成法形式の記述をみると、11例のすべてにおいて5つの機能のうち少なくともひとつで必ず母親があげられており、なかでも、Table 3 にみるとおり、「たよりにしている」、「つらいときの心の支え」、「つらいときにまず思い出す」などで多くあげられ、なかには5つのすべてにおいて母親をあげている事例もみられる。つまり、「焦点」と判定された母親が文字どおり構造の中核になっているといえよう。では、このような焦点を持つ構造においては、その他の対象はいかに位置づけられているのか。まず依存得点の配分の様相をみよう。

各様式においてどの対象の得点が高いかを図式的にあらわしてみると Table 5 のようになり、どの様式においても母親が第1位で、以下は父親、きょうだい、愛情の対象がほぼ上位をしめ、親友、尊敬する人、先生、ふ

Table 5 母親型における様式別の対象の得点順位

対象 様式	順 位							
	1	2	3	4	5	6	7	8
①+②	M	L	S	F	A	R	T	f
③	M	S	F	L	A	R	T	f
④	M	F	L	T	A	S	R	f
⑤	M	F	L	S	A	R	T	f

ただし：M(母親)，F(父親)，S(きょうだい)，L(love object)，A(親友)，f(友人)，T(先生)，R(尊敬する人)

つうの友人が下位になっている。つまり、母親型においては様式の別なく各対象のしめている位置が同じであり、愛情の対象を除くと上位を占めているのはいわゆる家族ばかりになり、他人がその役割りを果たす度合いが少ないという、家族中心の依存構造になっているといえよう。

この母親型の家族中心的傾向は他の資料においても顕著である。特に注目されるのは父親および愛情の対象についてである。

まず父親は他の型におけるよりも中核に近い存在であることがうかがわれる。精神生活における価値づけの規定をみると、肯定的情緒の規定6例、中性的1例、否定的1例、無答3例であり、肯定的な受容の傾向を持つものが多い。また、存在を支える意味の機能においては、「つらいときに思い出す」などにおいて各2例あらわれているが、多いのは「たよりにしている」という項目においてで、11例中5例が父母という表現で父親をもあげ

ている。が、焦点の母親とは異なり単独にあげられることはない。

次に、愛情の対象に関してであるが、母親型においてはいわゆる“恋人”を持たない傾向が著しい。この型においては“恋人”を持たないと答えたものが11例中10例であり、“恋人”を持っているという1例の文章完成法形式による規定では“個人としてのよき理解者”であるとしているにすぎない。これは後述の愛情の対象型における“恋人”の規定に比べそれほど情緒的ではなく、この事例では母親の次に愛情の対象の得点が高くなっているが「心の支え」は母親であり、「つらいときに思い出す」のは“家庭のこと”であるとしている。

次に、この型に属する典型的な事例を取りあげる。

<事例 99> 大学1年生で家族は父母姉妹の4人、自宅から通学している。

依存得点からいうと「焦点」が母親(329点*)、次が父親(267点)、きょうだい(242点)、親友(239点)、先生(141点)、友人(138点)の順になり、愛情の対象、尊敬する人はいない。この事例では、すべての様式において母親が高く、母親は“よき助言者であり、いちばんの心のよりどころである”と肯定的情緒的に規定され、親密度は17点で高い。存在を支える機能においては「心のよりどころ」「生きがい」「つらいときに思い出す」のは母親であり、「たよりにしている」「心の支え」は父母であるとし、また、「気持ちのうで逃げこめる場所」は“母と相談すること”であるとして、「焦点」と判定された母親が依存構造の中核になっているようすがうかがわれる。その他の対象については、まず、父親は親密度16点で母親と1点しか差がないほど親和の関係にあるが、“よき相談相手であり、心のよりどころ”と母親の規定よりはやや中性的に規定されている。様式別の得点でも、様式⑤(心の支えを求める)は全対象のなかでは母親の次に高いが、それでも25点の開きがあり、他の対象よりは心の支えにはなっているが、母親に比べると相当に少なく、父親においてはむしろ様式④(承認を求める)の方が高い。そして「たよりにしている」で父母としてあげられているように、依存の対象としては母親とは異なり道具的色彩があることがうかがわれる。次に得点の高いきょうだいとは姉であり、“よき相談相手”と規定され、この姉も様式⑤がもっとも高く、父親の次の心の支えになっている。このように事例99は母親型の特徴を示している家族中心型である。その他の対象では、親友は“時にはよい相談相手である”とされ、様式①+②(ともに在ることを求める、注意をむけてもらうことを求め

る)、③(助力を求める)などの幼いしかたが優位になっている。が、依存の対象としての親友は家族よりは重要度が少ない。先生やふつうの友人に対する依存は非常に少なく、ともに様式④だけがやや高くなっている。このように依存構造のなかで依存要求がむけられることの少ない対象では、様式④のようなしかたが優位になるのであろうと予想される。

以上のように本事例は母親に存在の中心的部分を支えられ、やや道具的色彩をおびる父親と、母親に似た意味の支えをする姉を依存構造の中心におき、幼いしかたで依存してもよい親友も時には必要とし、友人や先生には社会化されたしかた(様式④)で依存しているというような母-家族中心の役割り分化がなされている。

2) 愛情の対象型

これは愛情の対象の依存得点が他に比べて顕著に高く、愛情の対象が「焦点」と判定される型である。

まず、愛情の対象が焦点とみなしうるのか否かを文章完成法形式の記述にみると、愛情の対象型の場合の焦点はさきの母親型のそれとはやや異なっていることがうかがわれる。すなわち、存在を支える意味での機能を果たしているものをあげさせた Table 3 にみるように、この型においては、存在を支えているものは全体としては「焦点」と判定された愛情の対象同様に母親、父親、家族が高い頻度で出現しているのである。

このように愛情の対象型においては、「焦点」と判定された愛情の対象が、母親型の焦点である母親ほどにはすべての事例において存在を支える機能をはたしているとはいえない。しかし愛情の対象が5項目の機能の記述のなかにあらわれるのはただこの型においてだけであり、他の型においてはあっても1例という程度でしかないことを考えると、焦点である愛情の対象と、そうでないそれとの質的差異を認めざるをえないであろう。

なかには存在を支える機能の記述の5つのうちの3つ以上において愛情の対象をあげているものもあるが、Table 3 にみるように、一般的には愛情の対象は道具的価値的ニュアンスの強い項目である「もっともたよりにしている」対象にはなりえてはいないが、「心の支え」「心のよりどころ」「つらいときに思い出すもの」のような情緒的な支えとしてあげているものが多く、特に、他の型においてはほとんど人間が出てこない「生きがい」において愛情の対象が出現するのはこの型の特徴である。

精神生活における価値の規定においても愛情の対象は当然のことながらすべて肯定的情緒的な規定をされ、“生きるすべてである”、“命の次に大切である”、“心の支えである”、“最大に心をしめている”、“苦しいものであ

* 得点は、最高得点に対する比に換算したものである。したがって、対象1人についての最高得点は400点となる。

る”などがみられた。

このように依存得点から「焦点」と判定された愛情の対象は依存構造の中核にあり、その個人の存在を支える中心的な機能を果たしている、といえよう。ただし、この「焦点」は母親型のそれとはやや異なり、後者におけるよりは道具的ニュアンスが少なく純粋な精神的支えという機能が大きくなっているといわなければならない。

次に、この型におけるその他の対象の位置づけはどのようなものであろうか。まず、各様式別の依存得点の配分をみると Table 6 に示すように各様式において愛情の対象が最高得点を取り、様式①+②、③のような未成熟な依存のしかたにおいては父母、きょうだいの家族が上位にあり、尊敬する人、親友、先生などの他人が下位になっているが、様式④においては両者の順位が逆転していることは注目すべきであろう。

Table 6 愛情の対象型における様式別の対象の得点順位

様式	対象	順位							
		1	2	3	4	5	6	7	8
①+②		L	M	F	S	R	A	T	f
③		L	M	S	F	R	T	A	f
④		L	R	T	A	F	M	S	f
⑤		L	M	F	A	S	R	T	f

このようにこの型において著しいことは、様式により対象の得点の順位が変化していることである。そして、愛情の対象以外の他人が依存の対象として得点のうえで上位をしめるということは母親型にはみられなかったことである。愛情の対象型においては、愛情の対象や家族を中核としながらも、相対的にみると保証を求める様式というより社会化されたしかたで他人を依存構造内に入れる割合が母親型よりは増していると思われるのである。

このことは親友の受容の程度において特に著しい。愛情の対象について得点が高いものは何であるかを事例別にみると、母親8、父親3、父母1、きょうだい2、その他12であり、その他のなかで親友が2位のものが8例あり、これは前述の母親型にはみられなかったことである。そしてまた、文章完成法形式で記述させた精神生活における規定でも、親友は母親型におけるよりは肯定的情緒的になされる傾向が増しているのである。

次に、この類型に属する事例をあげる。

<事例 53> 大学3年生で家族は父母姉兄の4人で自宅通学をしている。

依存得点からいうと愛情の対象(400点)、母親(287点)、父親(265点)、きょうだい(264点)、親友(209

点)、尊敬する人(207点)、先生(133点)、ふつうの友人(28点)の順になる。

すべての様式において満点をとっている愛情の対象は“わたしの生きていくすべてである”と規定され、存在を支える機能においても「心のよりどころ」は“一部分は家庭のなかにあるが、大部分は恋人にある”とし、「たよりにしているもの」も「心の支え」も「つらいときに思い出す」のも、すべて恋人であるとして、得点から「焦点」と判定される愛情の対象はあらゆる意味で構造の中核になり焦点となっていることがわかる。

この事例における父母は、母親は親密度点20で高く、“いつもいてほしい人。朝昼夜と必要欠くべからざる人物で、もっとも尊敬している”としている。一方父親は、親密度点13で母親より距離があり、“大きな問題とか、困難な問題のときに心のなかに入ってきて重要なポイントをにぎる”とし、母親とは異なる役割をとっていることがうかがわれる。様式別の得点を見ると、父母ともに様式④が高く、父母に対しても一般的な依存の様式をとっているが、母親では父親よりも様式⑤や③が高く、全対象をとおしてみても、母親の様式⑤や③の得点が第2位で、愛情の対象の次には母親が中核に近くあることがうかがわれる。それに対して父親はやや精神的支えという点では重要性が少ないが、しかし、きょうだいに比べると中核的になっている。きょうだいは“初恋の人で、いつでも男性のなかの男性だと思って信頼している”という兄であるが、様式④が特に高く、母親、父親よりは一般的な依存のしかたになっている。

また、親友、尊敬する人、先生なども様式④だけが大きく、⑤がもっとも低く、社会化された依存のしかたをしているが、相対的な重要性は他の対象に比べ減っている。この事例はふつうの友人に対する依存が非常に低く、愛情の対象に全面的に支えられ、母親、父親には要点を支えてもらうという中核をもち、ごく身近な人や権威のある人びとに承認を得るというしかたで依存し、依存の対象としてはふつうの友人は必要ではなくなっていると思われる。この事例は友人を次のように規定している。“まったく友だちがいないのもいやだが、いつもどこかで友人ができるので、特に親しい友人というのはいないし、いまは友人とは精神的なつながりはゼロ”。

3) 親友型

他に比べて親友の依存得点が高く親友が「焦点」と判定されるこの型は、本標本においてはわずかに3事例しかみられなかった。青年期には重要性が増していると予想される親友がこれら大学生女子においては一般的にはさほど多くの依存得点を得ていないことは興味ぶかい。事例が少ないために一般的な特徴は見出せないが、これらの事例にみられることは次のようなことである。

得点からみて「焦点」と判定される友人は、文章完成

法形式の規定ではすべて肯定的情緒的で、“心の安らぎを与えてくれる人であり、自分をもっとも理解してくれる人である”、“大切なもので、友なしには生活していけないと思う”などとされている。また、存在を支えるという意味での機能の記述においては、3例中1例において「心の支え」は親友であり、「たよりにしている」のは母親とともに親友であるというものがあるが、他の2例は人間をあげず「たよりにしている」のは“自分”であるとしている。事例が少ないために明らかではないが、親友型においては存在を支える機能をはたすものとして人間を書くものが少なく、親友はその他の対象に比べ中核的で焦点とはいえるが、前記2型におけるそれとはやや異なっていると考えられる。

Table 7 親友型における様式別の対象の得点順位

対象 様式	順位							
	1	2	3	4	5	6	7	8
①+②	A	M	F	L	S	f	T	R
③	A	R	S T		f	M	L	F
④	A	R	T	S	L	f	M	F
⑤	A	L	M	S	R	T	F	f

この型においてその他の対象はいかに位置づけられているかを依存得点の配分からみると Table 7 のようになり、この型においては、父母、特に父親に対する依存要求が弱く、家族以外の他人が様式③、④などで上位を占め、愛情の対象型同様、様式における分化がみられる。また、文章完成法形式による規定では、一般にどの対象も中性的に規定する傾向がみられるが、肯定的情緒的に規定しているものは、父母については2例、きょうだいについては1例、拒否しているものは父親については1例、きょうだいについては1例となっている。

また、依存得点が第2位に高い対象をみると、きょうだい、先生、愛情の対象が各1例ずつで、いずれも父母が第2位になっていないことは注目に値しよう。つまり、ここでは父母よりも他の対象が依存構造のなかで重要な役割りを占める傾向がみられるのである。

このように親友型においては、父母が中核的役割りはたすことが少なく、特に父親にはむしろ親しみを感じていない事例もみられ、相対的には家族以外の他人の重みが大になった依存構造が予想される。

4) 尊敬する人型

尊敬する人の依存得点が他に比べて高く、尊敬する人が「焦点」とみなされる型である。この対象が焦点といえるかどうかを存在を支えるという意味での機能の記述にみても、ここでは具体的に尊敬する人物がだれで

あるかをおさえてないのであるが、機能の記述のなかにはそれらしいものは現われていない。信仰を持ち「よりどころ」を神としているものが1例、5項目においてすべて神をあげているものが1例みられるのが他の型にはみられなかったことである。

また、この型においては母親も依存得点が高く、Table 3 にみるように、存在を支えるという機能を果たしているのはむしろ母親になっており、この両者が依存構造の中心的位置をしめていると思われる。この型において著しいことは様式と対象の関係を示した Table 8 に明らかのように、様式による対象の変化はみられず、一貫して「焦点」とみなされる尊敬する人物と母親が上位になり、逆に父親ときょうだいが下位になっているということである。つまり、この型においては、母親を除くと家族よりも他人の占める割合が相対的にみると多くなっているのである。この父親との関係が疎であるという傾向は、存在を支える機能をはたしている対象の記述において父親が出されることが少ないこと、母親に比べ親密度が低いこと、精神生活における規定においても拒否的および無答が半数になっていること、などにもみられる。また、得点の総計で第2位の対象をみると、母親のもの3例、他は親友1、愛情の対象2で、事例別にみて

Table 8 尊敬する人型における様式別の対象の得点の順位

対象 様式	順位							
	1	2	3	4	5	6	7	8
①+②	R	M	L	A	T	S	f	F
③	R	M	A	L	T	F	f	S
④	R	M	T	L	A	F	f	S
⑤	R	M	A	T	L	F	S	f

もここでも父親は現われないのである。このように尊敬する人型の特徴は、焦点と母親が中核的になり、父親の占める位置が少ないことで、尊敬する人は父親の果たす役割を代理的に果たしているのではないかと予想される。その他の対象は、恋人がいるというもの2例、ないもの3、不明1で、あるものはそれを肯定的情緒的に規定している。また、その他の対象の規定は一般に肯定的情緒的よりは中性的な規定の方が多い傾向がある。

5) 複数焦点型

これはさきの基準により焦点と認められる対象が2人以上いる型である。このうちまず2F型についてみよう。

上位群においては Table 2 のようにこの型は7例あり、そのうちわけは父-母型が3例、母-愛情の対象型、母-親友型、母-先生型、愛情の対象-尊敬する人型各1

例で、母親が「焦点」のうちの1つになることが多いと思われる。まず「焦点」とみなされる対象の様式ごとの得点の配分をみると、2F型においてはF型のようにひとつの焦点がすべての様式において最高得点を占めてはいないが、2つの焦点のうちのいずれか一方が必ず最高得点を得ている。つまり、得点上でみると「焦点」とみなされる2対象はたがいに補いあうかたちになっている。このことは、文章完成法形式で書かせた存在を支える機能を果たすものについての記述にも現われている。すなわち、5項目の記述において、これらの「焦点」とみなされる対象がすべての事例において、ともにあるいは単独に現われており、いずれも2つの対象がともに存在を支える中核的なものになっていると考えられる。また、焦点と予想される対象の精神生活における規定は1例を除いていずれも肯定的情緒的で、一様に親密度も高い。

この型の注目すべき特徴は、第1に焦点のひとりが母親になっているものが多いためか、母親型同様、愛情の対象が焦点の1人とみなされる事例を除き他は“恋人”をもたないと答えていることである。そして第2に著しいことは父、母が焦点とみなされない事例では、その父ないしは母の依存得点が低く、2F型では焦点になっていない父母は依存構造での重要性が少ないと考えられることである。

また、その他の複数焦点型は2F型と類似した特徴を示し、得点から「焦点」とみなされた対象はたがいに補いあい依存構造の中核となり、また焦点のひとりほとんど母親が占め、複数焦点型は母親型の変形型とみなされる。

以上みてきたように、各個人の依存構造にはひとつあるいはそれ以上の焦点を認めることができる。焦点はすべての様式においてもっとも多く依存要求のむけられる対象であり、かつ、尊敬する人型を除いて*その人の存在を支える機能を果たしており、文字どおり依存構造の中核になっていると予想されるのである。また、依存構造のなかにはさまざまな対象が含まれていると考えられるが、本調査で問題にした8人の対象についてみても、それぞれがまったく異なった重みや役割りをもっていることがわかる。つまり、一般的にいえば、焦点以外は様式⑤は少なく、同性でかつ同年令に近いと予想される親友に対しては比較の様式①+②のように幼いしかたの依存行動が優勢になる。そして、権威のあるもの、また、そ

れほど依存の対象として必要のないものにおいては、様式④や③が他の様式よりも優勢になっているといえる。また、8人のうちでどれかひとつについてまったく拒否してしまう（依存得点が0）という事例は上位群ではほとんどみられなかった。そして情緒的な支えとなっている焦点、焦点ほどではないがやはり情緒的な支えになっているごく少数の対象、そして道具的色彩のずっと増しているより多くの対象というように、対象間に役割り分化がなされ、その意味において相互関連的な依存の対象の集合としての依存構造ができあがっていると思われる。

要約と結語

本研究は依存性がいちおう発達の最終段階に達していると思われる青年後期において、それがどのような様相を呈しているかを、依存構造というモデルをとおして解明しようとするものであった。その結果明らかにされたのは次の3点である。

1) 依存構造： 依存構造には限られてはいるがかなり多くのさまざまな対象が含まれ、それぞれ異なった機能を与えられ、分化した位置を占めている。そして、この対象間の機能分化は、各個人が相対的に強い依存要求をひきおこす、その個人の存在を支える機能を果たするという意味で中核になっている単数または複数の焦点を中心に、いく人かの対象がそれぞれの役割りを与えられ、それぞれの意味を持ち、さまざまに位置づけられていることを予想させる。

2) 依存構造の類型： 依存構造の構造化の様相——対象の数、焦点の有無、焦点の数、焦点と他の対象との機能分化などは各個人において異なるのであるが、焦点が何かによって依存構造を類型化してみると、同じ類型間には対人的依存行動の共通点が認められることが明らかになった。

3) 大学生女子における依存性： 青年においてもここで問題にする意味での依存性が認められる。つまり、現象的には自立的であると考えられている大学生においても、少なくとも女子では依存要求が認められる。そして特に顕著なことは次のようなことである。

(1) 単一の焦点になる対象としては、母親、愛情の対象、尊敬する人などが多く、同性の親友や父親は少ない。

(2) 女子青年と母親との情緒的結合は強い。このことは他の研究（たとえば、久世・大西、1958）でも指摘されていることであるが、本研究でもこれと一致した結果が得られた。母親は単一の焦点となる傾向が大

* この型については、情報が十分ではない。すなわち、尊敬する人がだれであるかをきいていないために、この対象の性質が不明である。

であり、複数焦点型でも焦点のひとはほとんど母親であり、親密度も高い。

(3) 母親を焦点とするものは、他の型に比べ家族中心的傾向がある。またこの型では恋人もないものが多く、親友との結合も弱く、青年期の発達からみて問題を感じさせる。

(4) 焦点が多いもの、および明確でないものでは、高得点の対象のひとりにほとんど必ず母親が含まれる傾向があり、類型の特徴も母親型の様相を呈し、上記の(3)と考え合わせて、母親以外の単一の焦点の顕在化が発達の方角かもしれない。

(5) 大学生女子では父親との結合はそれほど強くはない。父親は情緒的に拒否されているわけではないが、依存構造のなかでは道具的色彩の増した位置づけがなされていると予想される。また、父親は尊敬する人と競合的な立場にあり、尊敬する人を焦点とする依存構造ではほとんど父親はしめだされる傾向がある。

(6) 一般に女子青年の依存構述においては同性の親友の占める位置は少ない。

＜付記＞ この研究は昭和39年度総合研究「現代社会における青年の人格形成」（代表者 依田新）の一部と

して行なわれた。本論文は昭和39年度・東京大学大学院教育学研究科に修士論文として提出したものの一部に加筆したものである。研究をすすめるにあたっては、依田新教授をはじめ総合研究のメンバーの諸先生方、および三木安正教授、波多野誼余夫氏（現独協大学助教授）からご指導を賜り、感謝するものである。

また、本稿をまとめるにあたっては、波多野氏から貴重なご示唆をいただいた。心からお礼申しあげる。

文 献

- 江口恵子 1963 児童の依存性とその発達の変容・日本教育心理学会第5回総会
- 江口恵子 1964 依存性の研究：のぞましい依存性とは何か・日本心理学会第28回大会論文集，289.
- 江口恵子 1966 依存性の研究（文献総覧）・教心研，14，45—58.
- 久世敏雄・大西誠一郎 1958 家族関係の研究(2) 青年・両親関係：心理的離乳・日本心理学会第22回大会論文集
- 高橋恵子 1967 女子青年における依存性の発達「青年の人格形成の研究」，依田新(編)，金子書房(印刷中)
(1967年8月17日原稿受付)

THE DEPENDENT BEHAVIOR IN FEMALE ADOLESCENTS : I

by

Keiko Takahashi

University of Tokyo

The present study was aimed at investigating dependent behavior (d. p.) of college women. It was the first of series of reports on developmental changes in d. p., dealing with its final phase, i.e. so-called independence. Dependent behavior was to be described in terms of (a) modes of d. p. and their dominance, (b) differentiation and number of objects to whom d. p. was directed, and (c) strength of dependent need which might produce d. p. toward each object. "Dependent need" denoted need for psychological support, beyond instrumental usefulness.

Two kinds of questionnaires were constructed and administered to 168 college women. The first questionnaire asked each female adolescent how she depended on what object through what modes or ways of d. p.. Mother, the most intimate friend of the same sex, the love object and five other persons

were selected on *a priori* ground as objects for dependence. The second involved SCT type questions concerning the role or value of each object in her psychic life.

The following points were suggested :

1) A female adolescent reported a high degree of d. p.. She generally had a number of objects for dependence. Each object had a different functional value for her.

2) She had a focus or foci of d. p., i.e., a person who supported her psychological existence and accepted strong need for dependence. Other objects' functions or positions in the dependency structure were determined to the nature of a focus.

3) When Ss were classified according to focus or foci, e. g., Mother-type, Love-object-type, 2-foci-type, those who had the same kind of focus showed similar behavior patterns to other objects.

MEMORY AND PROBLEM SOLVING

by

Kunio Wakai

Hokkaido University

The experiments reported in this study were made to investigate the developmental trends of memory ability and to examine the effects of presentational conditions and instructions in serial memory tasks.

A number of series of digits and the nonsense words of two syllables (Umemoto, T., et al., Association value and meaningfulness of two syllable

nonsense words, *Jap. J. Psychol.*, 1955, Vol. 26, No. 3, 148-155) were used to construct the experimental tasks.

The subjects were obtained from the third and the fifth graders in several elementary schools and the first and the third graders in a junior high school.

The main conclusions were as follows :